

# 聞名仁教

第119号  
(発行日)

2020年8月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み  
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月18日午後6時30分始

## 釋尊の五つのいましめ

い。ようするに不倫をしない。夫婦の関係は家庭の平和の基礎ですから、邪淫は夫婦の

仏教の教えは仏陀(釈尊)

の覚りの智慧から説かれた教説です。覚りの智慧のこ

とを大悲の智慧と申します。この大悲の智慧から、人間において気をつけなければ、人を悩ませ、自分の生活を破綻させ、ひいては社会生活を動乱せしめていく

ような行いを五つ示し、こうした行いをしてはいけないということ、釈尊は五戒を説いておられます。

この戒めは別段特殊なものではなく、どの時代に於いてもどの地域に於いてもほぼ共通な慎むべき行いと

言っているでしょう。共通なものということは普遍的な「常識」と言えましょう。

その五戒とは、殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、飲酒戒の五つです。殺生戒は人の生命を殺傷

るかという、自分の身体

が傷つけられ、さらに殺害されることとです。暴力を振るわれることと。自分がそんな目にあうとどれ

ほど辛いかを思って、それを他者にも当てはめて、他者の生命に危害をくわえな

いようにする。これは慈悲の行いの基本でありましよう。これを更に広げていく

と、人以外の生き物へのむやみな殺傷を慎むように気をつけようということになります。

偷盜戒は正当に与えられる財物以外の財物を自分のものにしな。盗みは勿論、賄賂や袖の下を受け取るなども入ります。新聞によく取り上げられる政府の補助金を不生に受給することなどもこれに入ります。国民から集めた税金を横取りするようなことです。邪淫戒は正當な夫婦関係以外の性的な交わりをしな

うになります。

妄語戒は自分の利益のため、あるいは不利益を蒙ることを怖れてウソつくことです。この戒めは一番守りにくいです。

今日、国会での参考人の答弁でしばしば自己保身のための虚言としか考えられない発言が時々なされるのを聴くと、日本全体の倫理

観の低下を感じます。ただ、もし自分もああいう立場に立つと妄語を吐かないともかぎらない弱さを感じます。ごく真面目な人がみんなの前で黒を白と言うのですから自己保身の心は根深いですね。

飲酒戒は飲酒をしすぎない。飲酒自体は悪いとは言えませんが、過度の飲酒は悪事や人を傷つけるような

ことをしかねなくなり、から誠められていくのです。当然麻薬の類いも同じですね。

こうした五戒を護ることは社会生活を安定させ、また自分自身の生活を守ることになるので、日頃から五戒を保つように気をつけて生活することを釈尊はお勧めになつておられます。

そして、こういう五戒に気をつけていくことは悪を悪、善を善と自覚していくことになり、人間の倫理感覚を養っていくのだと思います。

倫理感覚が乏しくなると人は悪を為しても悪と感じなくなり、いつまでたっても悪が止まないという恐ろしいことになるのです。先ず善悪の行いはどういふものであるかを「知る」ことが大事で、知ることによって自己批判がなされ、悪を慎み善に向かおうという態度が出て来るのです。

# 攝取の真理と十八願

ただくことのできるいのちの水のようなものです。

しまうのではありません。私の行いの善し悪しにかかわらず、ただのただで包まれているのです。自身の行為の善悪だけのことだけではありません。私の能力がすぐれているかいないかに関わりなく、また私の持ち物（財産や社会的地位や職業）の多寡や優劣に全く関係なく抱かれているのです。

理の一つである「万有引力の法則」は私たちがその法則に気がつこうが気がつくまいが働いていますから、太陽と月と地球の位置関係が変わらずに安定し続けているのです。私たちが学校でそれを学ぶ前も後も、それに関係なく働き続けています。

宗祖が「大無量寿経言というは、如来の四十八願を説きたまえる経なり」（尊号真像銘文）と述べられていますように、無量寿経の内容はアミダ仏の四十八願であり、四十八願の中心は第十八願です。第十八願に四十八願は収まりますから、大経は第十八願の救いを説かれたものであるといつても過言ではありません。

宗という一つの教義に収まるものではないでしょう。いわば、古今東西、万人のところに働きづめに働き、今も一人一人のところに働いている、そういう普遍的な真理（真実）でありましょう。

攝取不捨の真理についてですが、先ず攝取不捨とはアミダ仏の攝取して捨てない働きをいいます。攝取とは「おさめとつて捨てない」ということです。だれを攝取してすてないのか、それは人（私であり衆生）です。

また生まれるのもその中に於いてであり、死ぬのもその中に於いてであります。健康な時も病んでる時も、いついかなるときもアミダ仏のあたたかいのちの中に置かれているのです。

ところが攝取不捨の真理はこれを一人一人が知らなければ、その人にとつてその恩恵は感じられません。しかも、この攝取不捨の真理を知る智慧は、第十八願をよく聞くことによつて、第十八願の働きによつて私たちに信心として与えられるのです。

では積尊は何を最終的な根拠として第十八願を説かれたのかということ、先月号に、それは宗祖が「攝取不捨の真理」と言われた真理に依るのではないであらうか、と述べさせて頂きました。

この場合、功德とはよき働きのことで、この働きのであうと人はそこにゆるぎない幸せを得ることができるといふことです。

アミダ仏とは「はかりなき大悲のいのち」のことです。そこで攝取不捨とはあたたかい大悲のいのちに衆生は攝取取られていて捨てられない、そういう真実（真理）の中に人ははじめから置かれている。そういう真理が攝取不捨の真理です。

しかし、問題はこの真理の恵みは、これに気がつかなくなったら、（私自身の）恵みにはならないのです。その恵みは無きも同然です。この真理は知らなければ真理としての恵み（利益）はその人に活性化しないのです。

さてその第十八願は、「たとい我、仏を得たらんにして 我が国に生まれんと欲うて 乃至十念せんに 若し生まれずば 正覚を取らじ。ただ五逆と正法を誹謗せんをば除く」

その攝取不捨の真理と、真宗の救いである弥陀の本願（第十八願）とはどういう関係にあるのでしょうか。

いたずらに流れ去っていく人生、いつながる起るか分からない不安な人生、孤独な魂をなくさめることもできない人生、その茫漠たる人生生活の中にあつて、攝取不捨の真理の恵みは、砂漠の中のオアシスのようなもので、人がつねに湧き出ている泉に口を付けてい

逆の、私が悪人だから大悲のいのちから見捨てられてしまふのではありません。私の行いの善し悪しにかかわらず、ただのただで包まれているのです。自身の行為の善悪だけのことだけではありません。私の能力がすぐれているかいないかに関わりなく、また私の持ち物（財産や社会的地位や職業）の多寡や優劣に全く関係なく抱かれているのです。

また生まれるのもその中に於いてであり、死ぬのもその中に於いてであります。健康な時も病んでる時も、いついかなるときもアミダ仏のあたたかいのちの中に置かれているのです。

また生まれるのもその中に於いてであり、死ぬのもその中に於いてであります。健康な時も病んでる時も、いついかなるときもアミダ仏のあたたかいのちの中に置かれているのです。

普遍的な真理ですから、真

普遍的な真理ですから、真

普遍的な真理ですから、真

普遍的な真理ですから、真

普遍的な真理ですから、真

まず「十方の衆生よ」と、  
アミダ仏は私たちに喚びかけておられます。十方の衆生はすでにアミダ仏のあたたかいのちの中にいる存在ですから、私たち一人一人に「十方の衆生よ」「我が子よ」と喚んでいてくださるのです。ザクロの果実の中に種（私たち）がいつばい詰まっているように。

「至心信樂して」とはアミダ仏は私に「私の救いを素直に本当と信じさせたい」とのアミダ仏のやるせないお心です。アミダ仏の撰取不捨のお助けの中にいることを知らない私たちに撰取不捨の真理を知らせたい、信じさせたい、信じさせずにはおかないというお心です。

そして「我が国に生まれんと欲うて」とは、「私の力で汝を浄土に生まれさせるから、生まれることができると安心してくれよ」のお心で、私たちを撰取して涅槃の浄土へ至らしめたもう捨てない」と喚びかけたもうお心です。

「乃至十念せんに、もし生まれずば正覚を取らじ」とは、「たとえ一声なりとも十声なりとも、念仏もうすばかりで浄土に生まれさせる。もしそれができないようなら私は仏にはならない」との誓いで、これは「称えるばかりで助ける」「まるまる引き受ける」の大悲の仰せです。撰取不捨の働きは一切の人にいつでもどこでも足下にあたえられている無条件の恵みであり、救いでもあります。それを知らせたもうお言葉です。

この第十八願に、アミダ仏は全ての人を、その行いの善し悪し、能力の有る無し、その他様々な資格や属性の有る無しに関わらず、私たちの全分を受け入れ撰取め取ってくださいていること。そしてそれを知らずに迷い苦しんでいる私たちに「汝、我が子よ、汝のありのまま撰取め取って捨てない、引き受けているから安心してくれよ」「そのままなりで浄土に生まれさせる」とのお心が第十八願の思し召しです。

そして最後に「ただ五逆と正法を誹謗せんをば除く」という文がきます。これは「仏法の真理を否定して五逆罪というような重罪を作りかねない者である汝は、自分の力では助かり様は無いのであるから、そんな汝を助けるから速やかに我が救いを受け入れて助かつてくれよ」の大悲のお心です。

アミダ仏と私たちとはこのような有難い撰取不捨の真理の中に置かれているのですが、それを知らず迷いに迷っている者に対して、撰取不捨の大悲の真理そのものが私たちに釈尊の説法を通して、第十八願として教示されたのでありましよう。しかも有り難いことに、第十八願は南無阿弥陀仏の言葉（撰取不捨の真言）となつて、私たちが喚びづめに喚んでくださっているのです。

この南無阿弥陀仏の真言（真実の言葉）を聞くことによって、「ここにいて、汝を引き受けている」という撰取不捨の大悲に触れ、撰

取不捨のアミダ仏を知らされるのです。「ああアミダ仏は私と共にいてくださる」「アミダ仏のいのちの外に私は無い」と知らされるのです。

私がここにいることそのことがアミダ仏のはかりないいのちの働きなくしてはあり得ないのです。そして私だけがアミダ仏の中にあるのではなく、万人万物がアミダ仏の働きの中にあります。こういうことを少しずつではありますが、知らされてくるのです。

大谷派の標語の中に「一つのいのちをみんなで生きている」というのがありますが、本当にそうです。こういうことは少しずつですが、知らされてくることは南無阿弥陀仏のお徳のおかげです。 (了)



### 【住職雑感】

先日、メンゲンベルクのバッハのマタイ受難曲を初めてCDで聞く。一九三九年の録音だからかなり音質は悪いが、全体的に鬼気迫るような迫力があつた。アマステルダム・コンセルトヘボウの演奏であるが、器楽演奏よりも合唱に迫力があつた。この時代のオランダでは、隣国ナチスドイツによる侵攻の恐れがある緊迫した状況だったからか、感激した聴衆のすすり泣く声が聞こえるというので有名になり『メンゲのマタイ』と言われるようになった。嗚咽は「憐れみたまえ、我が神よ」のアリアの中である。

マタイの中で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」という十字架にかけられたイエスの最後の叫びが、テノールでこれ以上の感情表現は無いというような悲痛なメロディで歌い上げられる。この言葉は「我が神、我が神、どうして私をお見捨てになつたのですか」という意味であるが、この言葉が発せられる場こそ神の救い（愛）が全現するところではないか。

私が高二の時、リヒター指揮のマタイを聞いて、西洋クラシックの中で最高の曲だと感じたが、それは今も変わらない。著名な音楽評論家の吉田秀和がゲーテを真似て「バッハの味を知らない人は幸福である。その人には人生で最大の至福の一つが待っている」といつている。親鸞にあえたこととバッハにあえたことの幸せを深く感じるのである。

# 木村無相さんの念仏

(仏教雑誌『大法輪』平成八年五月号掲載文の再録です)

## 真宗一筋への道

木村無相さんはまったく仏縁のない両親のもとに生まれましたが、二十歳になって、親を恨んだり憎んだり、腹をたてたり、ごまかしたりする、そんな己れの心の醜さに愕然とし、「なんとか煩惱を断じて悟りを開きたい」と思いました、道を求め始めました。それから結婚もせず、五十三歳までは真言宗と真宗を行ったり来たりしたのです。

浄土往生の因とされる信心は難信であって、人間の側からは取りつきようのないものといわれるし、かといって己れの煩惱をいかんともすることができないという、そういうジレンマのなかで、無相さんが見出した活路は、「ただ念仏せよ」というアミダ仏の「称名の本願」にしたがう道だった、と私は思います。

この「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の言葉は、よき人法然の仰せですが、その源は、善導の佛説無量寿經の第十八願文に対してほどこされた解釈(願釈)で、善導の『往生礼讃』のなかに次のように出ています。

「もし我成仏せんに、十方の衆生、わが名号を称して、下十声にいたるまで、もし生まれずは、正覚を取らじ。かの仏いま現にましまして成仏したまえり。まさに知るべし、本誓重願むなしからず、衆生称念すれば、必ず往生することを得」

法然はこのように表されている本願を「念仏往生の願」と言い、この願釈を、

「つねに口にもとなえ、心にもうかべ、眼にもあてよ・・・この文は、四十八願の眼なり、肝なり、神なり」(或る人へ示す詞)

と言っています。これが法然を救い、親鸞を救った直接の本願でした。それゆえ法然は、親鸞に描き写させることを許した自分の肖像画に、この第十八願の願釈を自らの筆で書き込んだのです。それは法然の救いがここにあり、浄土宗のよって立つところがあることを明示されたのでした。このことは、親鸞に対して「この心を伝えてくれよ」と託されたのであり、この願釈を身をもって了解した親鸞なればこそ法然浄土宗の真の担い手となったのです。

## 手紙による教化

無相さんの真宗聞法の道はこの「念仏往生の願」一つをまっすぐに徹底していただいでいく生涯だったと思います。称名念仏に親しみ、念仏申しつつこの願のお心を聞きつけていったのです。『真宗聖典』のほかには金子大栄先生の著作や藤原幸章先生の論文を愛読されました。そして力をこめてくり返し味読されたのは、香樹院徳龍師や一蓮院秀存師、それに禿頭誠師などの信心の語録でした。「真宗の教義だけ聞いては深まらない。先達の語録によって磨かなければいけない」とよく言われました。

それらを読んで読んで、称えて称えて、聞いて聞きぬいていく生活の毎日でした。しかも、それによって領解したことを有縁の方々に書いて送りました。それはまさに行者のごとくに書き続けられました。その便りを受け取った者はくり返しまき返し、お念仏のいわれを聞かせていただくことになりました。そして、私からの返事は「かならずあなたの本音を書け」との厳しい注文が無相さんからありましたので、どうしても、自分のありのままを書かざるをえず、またその返事には実に懇切丁寧なお手紙をいただきました。

このようなお育てのご恩にあずかった方はいぶん多いと思います。そういう意味で、身は福井県の老人ホームにありながら、大きな教化をされたといえます。

(次号へ続く)